

ぐんま便り



群馬地域会

上原 和彦

支部大会までの間、群馬地域会より開催地の情報をお伝えすることになりました。記念すべき第一回のテーマは、群馬県民であれば誰もが知っている「上毛かるた^{じょうもう}」です。



カルタ写真

「上毛かるた」と聞いても、他県の方は全く馴染みがないと思います。しかし、驚いてください。なんと群馬県民ならば知らない人は一人もいない、ローカル・ソウル・カルチャーなんです。

お年寄りから、小さな子供まで、頭の仮名一文字を言えば続く読み札をそらんじられるほど、心にすり込まれています。嘘だと思ったら近くの群馬出身者に「上毛かるたの“つ”は？」って尋ねてみてください。きっと間髪入れずに「つる舞う形の群馬県」と答えが返って来るはずですよ。

なぜこれほどまで上毛かるたが浸透したのかというと、冬、地区予選に始まり、県決勝戦を目指したカルタ大会が小学生を中心に各地で開かれます。幼い頃よりカルタ取りという遊びを通じて、身近な名所や史跡、文化や偉人に接することで、知らず知らずのうちに故郷の知識が身に付くのです。(決して群馬に他の遊びが無いからではありません。)

上毛かるた全44札のうち、名所や地域を表した地理札が28札、偉人を表した人物札が8札、県の特徴などを表したその他札が8札で構成されています。読み札の裏にはそれぞれの説明も記されていますが、そこは子供のことで、1枚でも札を取ることに全精力を注ぎ、絵札と読み句が直結しているので、特に人物札は、何を成した人なのかよりも、“怖そう”とか描かれている顔のイメージだけが記憶に残り、大人になってから改めてその人となりを知るなんてよくある事だったりします。



カルタ写真

上毛かるたの歴史をちょっと調べてみると、敗戦が色濃く残る昭和22年、GHQにより地理歴史の授業が制限される中、満州から戻った浦野匡彦氏により、故郷の歴史文化を子供たち

に伝えるために公募・編集されたそうです。真否は分かりませんが“郷土かるたの元祖”という説もあります。少なくとも先駆けの部類に入ることは間違いありません。

新品のカルタの蓋を取ると「い」と「ら」の赤い読み札が目に入ります。何故2枚だけが赤いのか気にした事ありませんでした。その理由が浦野氏のご令嬢が著した『上毛かるたのころ』※に記されています。(以下転載)『小栗上野介にこだわり続けて発禁となることを恐れた父は小栗公を引込め高山彦九郎・国定忠次等と共に詠み込めなかったこれ等の人々を「雷と空っ風上州名物」と応募した詞を「義理人情」という上州人気質の表現で表すことにした。しかし、それでも物足りず、何とかこれらの人々を強調したいと願う思いが、最後の段階で箱詰めの際の順序を思いついたという。現在でも箱を開くと一番上に「い」と「ら」がある。いろは順でゆくと「ら」は中に入ってしまうがこれを入れ替えて初版からこの順序を採り、いろはがるたの「い」を一番上に置き「ら」を並べてこの二枚の札のみ赤く染め目立たせたのであった。』時代を感じる逸話ですね。歴史の長さを改めて感じました。

長い歴史を持つ上毛かるたですが、唯一代わって行く読み札があります。それは「ち」の札。読み句は「力あわせる200万」絵札には人々を背景に“群馬”の立体的な文字。県民に「ち」の札を尋ねれば、その答えで年齢層がわかります。初版時160万に始まったこの札も、昭和48年改定で170万、52年に180万、60年に190万、最新版は平成5年改定で200万となり現在に至ります。そうです、数字は県人口を表しているのです。人口減少時代に入った今、再び190万に戻る日も近いのかもしれない。

改めて「上毛かるた」を見返してみると、時代を感じる札も確かにありますが、郷土の歴史を記す貴重な資料として、これからもカルタという遊びの中に群馬の文化が受け継がれて欲しいと思います。(もしも興味があつたら是非ご購入を…。2013年より全国大会「KING OF JMK～おとな達の上毛かるた日本一決定戦～」も都内で開催されているようなので挑戦してみても。群馬県民以外が優勝なんてことになったら大騒ぎかも知れません。)

※「上毛かるたのころ・浦野匡彦の半生」西片恭子 著 群馬文化協会 刊

COLONADE